
向日葵物語《ひまわりものがたり》

劉牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひまわりものがたり
向日葵物語

【Nコード】

N2192J

【作者名】

劉牙

【あらすじ】

ある探偵事務所が事件を解決していきながらあらたな恋がめばえ
そつな予感！？

少女の行方 前編（前書き）

初めてかく小説なので、おかしいところがあるかもしれません。
そこらへんはよろしくお願いします。

少女の行方 前編

日差しがさして晴れ晴れとする気持ちいい天気。暑すぎず、寒すぎず、そんな春の昼下がりだ。

「あゝ。今日はゆつくり過ごせそ〜」

向日 葵むかひ あおい 17歳はあくびをしながらつぶやいていた。

プルルルル、プルルルル、プルルルル・・・

そんな、のん気なことを考えていた矢先に電話がなった。

「もおゝ、誰だよこんな日に」

「葵、出ないのか？」眠そうな顔の夏唯が聞いてくる。

「めんどくさ〜い、夏唯が出てよ〜」

空木 夏唯うつせ かい クールというか、屁理屈ばかり並べる

あまり、自分の感情を表に出さない奴だ。

「もしもし、・・・はい。ええそうです。・・・え？・・・はい。分かりました。でわ、また後ほど」感情の全くこもっていない声で、受話器に向かってしゃべっている。

「誰だった？」葵は、ソファーに座って紅茶を飲みながら夏唯に聞く。

それに夏唯は、「依頼」と、ぼつりと言った。

「ええ〜。昨日別の依頼がかたずいたばっかじゃん！」

じたばたと足をばたつかせる葵。それを只無表情のまま、見ている夏唯。

「で？今回はどんな事件なの？なるだけ短くして話してね！」いやいやながらも聞く葵。

「蓮華家が大変なことになってる」夏唯はそれだけ言うことささと、身支度を始めた。

「・・・あの、夏唯君？話が跳躍されすぎてぜんっぜん意味分かんないんだけど」

小馬鹿にしたように言う葵に対して夏唯は「知らない」とだけ言う

た。
それ以上何も言ってくれそうにもないので、仕方なく葵も身支度を始める。

「ねえ？夏唯ってば！どこ行くの？」

事務所を出てからも、何も言わずにすたすたと歩いていつている夏唯に痺れを切らした葵は夏唯に聞いた。

夏唯は、葵の方を向きもせず「蓮華家のところ」とだけ言うともまたスタスタと歩いていつてしまった。

電車を、乗り継ぎ、1時間後に、蓮華家についた葵たち。

どこまで見ても続く屋敷に、歓声を上げている葵に夏唯はじろりと横目で見ながら、「遊びに来たんじゃない」と、言ってきた。

な、何よ！人が只すごいなあ。と思つて歓声あげただけじゃない！確かにちよつとはしゃいでたけど、だからつて、何も睨むことないじゃない！心の中で必死に叫ぶ葵。

そんな葵はそつちのけで1人でさっさと行つてしまふ夏唯。

葵は、その夏唯の背中にむかつて、アツカンベーとしていた。すると、タイミングが悪いことに、

夏唯が振り向いてしまった。アツカンベーをしながら一瞬固まつてしまった葵はすぐにそつぽを向く。

すると夏唯が「葵つて、時々子供になるよな」

鼻で笑いながら言う夏唯。それにまた、怒りを覚えてしまふ。

あゝもう！あいつは、何を言つてもこんなことばかり！

葵が1人へそを曲げていると、屋敷の中から着物を着た使用人のような人が、二人出てきた。

「空木探偵事務所の方ですね。お待ちしておりました。どうぞ中にお入りください」1人がそついつて

中に入るよう促す。夏唯は無言のまま入っていく。葵はぺこつと一礼してからその背中を追うかのように続く。

「まあ、夏唯つたら挨拶もなしに！」小声で言う葵に夏唯は「うる

さい」と言つて、早足で言つて行つてしまつた。

客室に通された二人は向かいのソファに座つている依頼者と軽く挨拶を交わした。

「初めまして」夏唯がめんどくさそうに言う。それに続いて葵は会釈だけをした。

「今日は、来てくださつてありがとうございます。私蓮華家当主蓮華んげ義孝よしとかと申します」義孝と名乗る男が深々と頭を下げる。

「いえ、で、どのようなご依頼でしょうか？」夏唯は単刀直入に聞いた。

「なーんだ。夏唯もどんな依頼が知らなかつたんだ。だからさつき知らないつていつたのかな？そーならそーと言つてもらわないと分からないじゃん！そんなことを考えていたら、気付いたら今回の事件のあらすじの話が始まつていた。やばいと少し焦りながら葵は話に耳を傾けた。

「昨日のことなんです、私の娘の綾香あやかが誘拐されたんです。どうか、犯人を暴き出して、娘を助けてください！」義孝から徐々に冷静さがなくなつていくのが手に取るように分かつた。

そんな義孝にも夏唯は当たり前かのように、表情ひとつ変えずに淡々とした口調で「落ち着いてください。その時の状況をもっと詳しく教えてください」となだめるように言った。

「夏唯！もうちよつと言い方つてもんがあるでしょ！」葵がひそひそというと「葵は何にもしゃべんないのに、偉そうに」などといつてくる。ムカー！つとした葵は夏唯の足を思いつきり踏んでやつた。案外効いたらしくて一瞬間を歪めた夏唯。ふふん 葵は勝ち誇つたような笑みを浮かべる。

そんな様子を見いていた義孝が、「どうかされましたか？」と聞いてきた。

「いえ、何でもありません。この馬鹿がうるさくて。どうぞ続けてください」指で葵を指している夏唯に義孝は一瞬きよとした後に笑いだした。

なぜ笑われるのかが分からず二人とも同様に隠せずにはいた。とおもったのは葵だけで夏唯はいつものようにボーカークフェイスを決め込んでいた。そんな二人（正確には葵だけだが）を見てはつとしたのか、義孝が咳払いをして「すまない。君たちを見ているととても仲がいいように見えてね」そういつて軽く頭を下げる義孝。

「さて、本題に戻そう。」そういつてあらずじを話し始めた。

義孝によると、昨日の午後2時頃執事の山本^{やまもと} 秀久^{ひでひさ}さん、綾香ちゃん、義孝さんの三人で庭の桜で、お花見をしていた。それから、綾香ちゃんだけが残つて、義孝さんは仕事に、執事の山本さんは、紅茶を入れに席をはずしていた、それから、執事が戻つてきたところ、怪しい男が桜の木を伝い綾香ちゃんを連れ去つていくところを目撃、慌てて外にいき怪しい男を捕まえようとしたが、外に出たときにはもうどこにもいなかった。とまあ、こんな感じだった。

夏唯は話を聞き終わるなり「分かりました」と言つてさつさと客室から出て行つてしまった。

「あ、ちよつと待つてよ！」葵が叫びながら追いかける。「失礼します」そういつて客室から出て行つた。夏唯は例の庭に行くらしく、使用人の人に話を聞いていた。

「葵、ちよつと頼みがある。調べてきてくれないか？」ぼくとして上の空だった葵にいきなり夏唯が話しかけてきた。「あたし？何を調べるの？」すつとぼけた声になつてしまった。

「これを調べてほしい」そういつて渡されたのは一枚の紙だった。そこに何を調べるかが書いてあつた。1・犯人が残したものはないか。2・さらわれたときの庭の状況はどうなつていたか。この二つがかいてあつた。こんぐらい自分で調べよ！！ていうか、こんなのでいつ書いたんだろ。そういつても、口には出さずに「はいはい、承知しましたよ、探偵さん！」軽くいやみをこめて言つたつもりなのに、夏唯は「たまには素直じゃないか」などといつて、馬鹿にしてくる。

少女の行方 前編（後書き）

初めて書く小説が推理小説で自分でもびっくり？）。。ノ（ノで
す。

ところどころおかしいかもしれませんがどうぞ楽しんで読んでくだ
さい。

少女の行方 後編

夏唯から頼まれたことは以外にも早く終わった。

1・犯人が残したものはないか　は、庭などを見て回り落ちているものなどを徹底的に探すだけ。

2・さらわれた時の庭の状況はどうなっていたのか　は、意外なことにその時の写真がありすぐに分かった。

はあ。何であたしが夏唯なんかの助手なんだろう……。

確かに、助手にしてほしって言ったけど……。はあ……。

そんなことを考えながら葵は夏唯を探していた。

「義孝さん警察には連絡したんですか？」

夏唯は依頼人に聞く。だが、答えは返ってこなかった。多分していないのだろう。そう予想した夏唯は、すぐに違う質問を投げかけた。

「義孝さんは、仕事でもお金の貸し借りがあり、問題になっているそうですね」

相手があまり聞いてほしくないようなことでも夏唯は当たり前のように聞く。

しかも全く聞いている態度とは思えないくらいめんどくさそうにだ。これには義孝も無言のまま怒りを押し殺していた様子だった。貧乏

ゆすりを繰り返してはやめていた。

それでも夏唯はお構いなしに大あくびだ。あげくの果て「何をそんなにイライラしているんです？」

などとふざけたことも言っていた。

これには義孝も堪忍袋の緒が切れたらしく、すくつと立ち上がり「仕事の時間だ」といい

スタスタと歩いて行ってしまった。

そんな後姿を眺めていた夏唯の後ろから声が聞こえた。

「あ、いたいた！夏唯く頼まれたこと調べてきたよ」

そういつて葵はひらひらと紙を振りながら小走りで近づいて来た。

「ナイスタイミングだ、葵」

たまにはやるじゃないかと言わんばかりの口調だったが、葵はなんだか照れくさかった。

「で？結果はどうだった？」

早速聞いてきた。

「えつとね、庭には犯人が残したものらしい物は無かったよ。で、犯行時の状況はね・・・。あ、あったあつた」

そういつて1枚の写真を取り出す。

「これ、お花見してた時の写真だって！」

いい手がかりを持ってきたと自分でも思っていた葵は恐る恐る夏唯の表情を確かめてみた。

すると、その視線に気づいのか微笑みながら「上出来だ。」と言った。

その一言にいや微笑みにびっくりした葵は正直に喜ぶことが出来なかった。

なぐんだ。夏唯でも笑えるんだ。などと思ってしまった。

夏唯はその写真を見ながら「なるほど」などとブツブツ言いながらスタスタと歩いて行ってしまった。

そんなに手がかりになるような物が写ってたかな？と疑問に思いつつも置いていかれないようにその背中を追いかけた。

「ねえ、夏唯？どこ行くの？」

答えてくれないのを承知で聞いてみた。しかし夏唯は意外なことも、普通に答えてくれた。

「執事の山本さんの所」

そっけなく答えたつもりだろうが、その言葉には、何か確信のようなものがあつた。

夏唯は山本さんのところにつくなりすぐに質問を投げかけた。

「山本さん。貴方が綾香ちゃんが連れさらわれるのを目撃したんで

したよね？」

夏唯はいつもの口調で聞いていた。

「ええ。そうですが。何か分かったんですか？」

執事の山本はいきなりの質問にびっくりしながらも答えていた。

「いえ、今わ何とも言えません」そっけなく答えると早々と次の質問に移った。

「では、貴方が目撃した時の状況をもう一度詳しく教えてください。頭をかきながら明らかに聞く態度じゃない感じで聞いている。それでも、山本は丁寧に話はじめた。

「あの時は、・・・私が紅茶を持って来ようと席をはずし、戻ってきたらお嬢様が連れさらわれていて、とっさに叫びながら、犯人を捕まえようと思ったのですが・・・。桜の木を伝って逃げられてしまい・・・」

そういつて私のせいだなどとブツブツ言い始めた山本に「そうですか」とだけ言って、またどこかにスタスタと行ってしまった。

「あ、あの、お答えいただきありがとうございます。あんまりお気になさらない方が良いでしょうよ」

葵はそれだけ言うつとぺこつと一礼してから夏唯の背中を走って追いかけて行った。

夏唯は何か分かったのかもしれない。だとしたらもうすぐ夏唯の名推理が聞ける！

そんなことを考えてワクワクしている葵に気付いた夏唯は「何をニヤついている？不謹慎だぞ」

そう言ってまた葵にいやみのつもりで言ったのだ。

だが、当の本人は、確かにそうかもしれない。少女が一人危ない目にあっているかもしれないのに

浮ついたことを考えているのは不謹慎だ。

夏唯に言われた事を素直に受止めた葵は心の中でそつと綾香ちゃんに謝った。

「ねえ？夏唯、次はどこに行くの？」

なんとなく聞いた葵はうかつにもまた顔が緩んで楽しそうな表情になっちゃった。

「葵は遊びに来たのか？」

と、いつものようにいやみで返ってきた。

はいはい、どうせ私は役にも立たないし、不謹慎極まりないですよーだ！

そんなことを考えながら歩いていたら、廊下の突き当たりで、曲がることに気付かず葵は思いっきり顔面から壁に激突してしまった。ゴン！という鈍い音がしてからジワジワと痛みが広がっていく。

「いったあつ・・・！」

音に気付いた夏唯が振り向きなり爆笑した。

「葵を見くびってたよ・・・。正真正銘の馬鹿だったんだな！」

そういつて必死に笑をこらえている夏唯。

葵は痛さのあまり怒ることもできなかった。

そんな葵をみて夏唯が珍しく笑いながらも「大丈夫か？」と聞いてきた。

あゝもあ、なんか自分が情けなくて仕方ないなあゝ・・・。

「・・・大丈夫・・・」

小声で言っ先に行くように促した。

「気をつけるよ」

そう言っ先に進みだした夏唯に置いていかれないように痛さに耐えながら葵は歩き出した。

次に夏唯が来たのはお手伝いさんの所だった。

ここでも夏唯は前置きもなしにいきなり質問した。

「綾香ちゃんがさらわれたと思われる時間帯に怪しい音など犬の鳴き声などは聞こえてきませんでしたか？」

と、かすかにまだ笑いながら聞いた。

葵は夏唯の方が笑いながら質問して、よっぼど不謹慎だ！そんなことを思いつつお手伝いさんの話に耳を傾けていた。

お手伝いさんは、

「私が聞いたのは、執事が騒いでいる声だけでした」

そういうと「忙しいのでこれで失礼します」と、さっさと行ってしまった。

その言葉を聞いて確信を持ったのか、夏唯は満足そうな表情で、

「今日はもう帰ろう」

そして歩き出した。

「ちょっと待つてよ！謎解きしないの？綾香ちゃんがいなくなったままなんだよ？」

だが、夏唯は落ち着き払った様子で

「綾香ちゃんなら無事だ」

言い切つてさっさと歩き出した。

葵は仕方ないというふうにかの家に挨拶をして屋敷を出て行く夏唯の背中を追った。

少女の行方 解決編

ザーという雨の降る音で目が覚めた。

「昨日はすっごい晴れてたのになあ〜」
葵がつぶやく。

「葵〜、いつまで寝てるの？夏唯君もう来てるわよ！」
母の和恵が階段の下から叫ぶ声を軽く無視しようと思ったが夏唯という名前を聞いた瞬間跳ね起きた。

「嘘！夏唯もう来てるの？早すぎ！今、何・・・じ・・・だ・・・と・・・ええー！ー！！うっそもうこんな時間？！」

今何時かを確認した葵はあまりの驚きに叫んでしまった。

10時55分。夏唯が来てて当たり前前の自時間だ。あ〜どうしてお母さん起こしてくれないのよ〜！！
「ごちゃごちゃと考えながら着替えた。

「まあ、葵ったら。ゴメンね、夏唯君。もう少し待っててくれるかしら？」

「はい。お構いなく」

夏唯はにっこつと微笑んだ。

ドタドタドタドタ。階段を一気に駆け下りてきた葵に「もう少し静かに下りなさい！」と母が怒鳴っていたが、葵はそれどころじゃない。

なんたつてあの皮肉屋の夏唯を待たせてしまっている。お母さんの前ではともかく、その後がどんないやみが飛んでくるか・・・。
あ〜もう、考えるだけでも落ち込んでくる。

「夏唯、ゴメン！寝坊した！！」

叫びながらリビングのドアを開けた。その瞬間ぞわつと寒気がした。その理由は、あの夏唯がにっこり微笑んで、「全然気にしてない」と言ったからだ。

「あ・・・、そ・・・お・・・」

固まりつつも、やっとの思いでそれだけ言い急いで朝食を摂った。

「お母さんいつてきまーす。」

「いつてらっしやい。気をつけるのよー！あと、夏唯君に迷惑かけないのよー！」

「はいはい」と適当に返事する葵に夏唯は「同感だ。迷惑かけるなよ。」と小声で言われた。

何よ！と言いつ返そうと思ったがやめた。どんな皮肉で返ってくるか分かったもんじゃない。

それから、駅に向かう途中散々夏唯にいやみを言われた。

だが、葵は半分ほどは聞きそれから聞き流すことにした。

お屋敷につき、昨日と同じお手伝いさんが「どうぞ」と中に入れてくれた。

やっぱ広いよなあ。一度でいいからこんなところに住んでみたいなあ……。

そんなことを考えながら歩いていると「ボーっ」としてるとまたぶつかるぞ」言われたた。

かあつと一気に葵の顔が赤くなった。

「わ、分かっているよ！」

「分かっているならいいがな」

馬鹿にした口調で言われた。

どーせ私は馬鹿ですよーだ！馬鹿で何が悪いわけ？？

葵は逆に開き直ってしまった。

ガチャツ。ドアが開く音とともに義孝が入ってきた。

「探偵さん。今日こそは綾香が見つかるのでしょうか？」

心配な義孝の問いに、

「心配はいりませんよ。すぐに見つかります」

と余裕だった。

「では、早速謎解きの方をしたいと思うのですが、その前に、執事

の山本さんとお手伝いのお二人を連れてきていただけですか？」
さっさと終わらせようと思っているのだろう。早口でまくし立てている。

「はあ、少々お待ちください」

なぜ、山本とお手伝いが出てくるのか全く分からないといったふうにあいまいな返事をする義孝はすぐ

に行動に移った。

義孝も早く綾香を見つけたのだろう。

暫くして、山本とお手伝いが部屋に入ってきた。

「お呼びでしょうか？」

山本がつぶやくように言った。

「はい、この謎解きには貴方たちの証言とこの写真が必要不可欠です」

夏唯はもう事件が解決したかのように確信に満ちた口調で言った。

「では、早速謎解きのほうを始めます」

前置きをしてから話し始めた。

「まず、山本さん。あなたが綾香ちゃんが誘拐されるのを目撃したんですよね？」

「え？・・・あ、はい」

山本は曖昧な返事をした。きつといきなり聞かれて戸惑ったのだろう。

「そして犯人の男は綾香ちゃんを連れてこの桜の木を伝って逃げた」と

夏唯は写真の桜の木を示しながら昨日山本が言ったのと同じことを繰り返す。

「ええ、はい。確かにこの桜の木を伝って逃げて行きました」

山本はなぜそんな聞く必要がある？といったふうに顔を歪めながら返事をした。

「では、お手伝いさん。この時あなたが聞いたのは、山本さんの慌てる声だけだったのですよね？」

「はい。そうです」

こちらも、なぜそれを聞く？といった感じだ。

「でも、それじゃおかしいんですね」

夏唯はわざとらしく眉をひそめる。

「なんで？おかしくないじゃん。犯人が音たてて逃げたら相当の馬鹿だよ？」

葵は夏唯に聞くが、まだ分からないのかとでも言いそうな顔だ。

だが、実際に夏唯以外の誰もどこがおかしいのか分かっていない。

「ココに注目してください」

桜の気を指差す。

別に、桜の木に変わったとこなどどこにもない。しいて言えば桜の木に大型犬が三匹つながれてるだけだ。

……沈黙が流れる。

ん〜おかしいとこかあ……あ！

「分かった！！」

突然叫んだ葵にびっくりしたのか皆がいつせいに葵のほうを見る。

なんだか恥ずかしくなり顔が赤くなる。

「こついう事でしょ、夏唯？この桜の木には大型犬が三匹も繋がれてるのに、犯人はこの木を伝って逃げた。もしそれができたとしても犬が吠えるはず。でもお手伝いさんは執事が吠えるの以外聞こえなかったっ手言ってるからおかしいってことでしょ？」

葵は早口で一氣にまくし立てた。

「」名答「

たまにはやるじゃないかといった言い方だ。

「今、葵が言ったとおりです。お分かりいただけましたか？」

たしなめるように言った。

「ですが、では誰が犯人なんですか？」

お手伝いの1人が言った。

「それは、山本さんですよ」

さも当たり前のように言う。だが、夏唯が言ってることはかなり突

拍子もないことだ。

「山本さん、そうですね？いい加減あきらめてはどうです？」
なだめるように言う夏唯に山本は、

「そんなの、こいつらが嘘ついてるかもしれないだろ！」

明らかに動揺を隠せない様子で、お手伝いたちを指差した。

「そんなことできると思いますか？彼女たちは女性です。少女を一人抱えて木を登れますか？」

そんなことも分からないのかと聞いたげな顔だ。

その言葉を聞いた義孝が「そうなのか？信頼していたのに……。」
そうつぶやいた。

その言葉に山本が反応しわめき散らした。

「何が信頼していただ！人の給料勝手に減らして拳句の果て使用人を増やそうかとか言いだして！そんな金があるなら給料を減らすなよ！」

早口で一氣にまくし立てた山本を「まあまあ」などと夏唯がなだめる。

「とにかく、さっさと綾香ちゃんの居場所を教えてください。僕はあまり気が長いほうじゃないんです」

こんな状況でも、のん気なことを言っている。

「……お嬢様は、私の部屋の地下に居る」

夏唯にはかなわないと思ったのかあっさりと居場所を吐いた山本はそのまま黙り込んでしまった。

「これで一件落着いですね」

大あくびをしながら疲れたとでも言いたそうな顔で出て行った。

「あ、ちよつとまってよ！綾香ちゃん見つけてからじゃなくてもいいの？」

「だから今山本さんが言ったじゃないか。」

めんどくさそうに言う夏唯。こうなったらもうどうにもできない。

「ということ、あとは任せました。警察に渡すのも綾香ちゃん見つけるのも自分たちでやって下さい。無責任なのは分かっています」

が、あたしたちの仕事はあくまで、謎解きですので」「
ぺっこつと頭を下げさっさと葵も部屋を出て行った。

それから暫くしてニユースで山本のが流れた。綾香ちゃんも無
事見つかったようだ。

「これで一件落着だね!」

ニユースを見ながら夏唯に言ったが案の定「葵は大して動いてない
じゃないか」と皮肉で返ってきた。

まだまだこいつとの付き合いは変わりそうにないなあ・・・
なぜか葵はそんなことを考えていた。

番外編く出会い

葵はいつものように空木探偵事務所に向かっている途中、あたしと夏唯ってどうやって合ったんだっけ？そんなことを考えていた。

葵の家から夏唯家までざつと30分は掛かる。

その間いつも葵は夏唯の事を考えている。

「ん〜なんでだっけなあ・・・。」

「ポーっとして歩いてるとまたぶつかるぞ」

「何よ！夏唯には関係ないで・・・しょ・・・？・・・なんで夏唯がここにいんの？」

必死になって考えていた葵の目の前にいきなり夏唯が現れた。

まだ事務所までは20分は掛かる。

「買い物」

ポツリと言った夏唯の右手には買い物袋がぶら下がっている。それを確認してすぐに夏唯は行ってしまった。

「あ、ちよつと待ってよ！」

駆け寄る葵にうるさいと言わんばかりの目で睨む夏唯。

「ふーんだっ！そんな顔しても怖くないモーン」

勝った！心の中でガッツポーズする葵に「ガキだな」と言った。

キッチンときた葵は思いつきり夏唯の足を踏んでやった。

「いつ・・・っ」

顔を歪め今度は何も言わずにサツサと歩き始めた。

やった今度こそ勝った！心の中で再度ガッツポーズする。

それから夏唯は話しかけても無視してくる。葵にはとても耐え切れなかった。

無視されては暇だしなんだか悲しい。

暫く無言で歩いていたら事務所についた。

「ねえ、か〜いつ！無視しないでよ〜！ねえつてばあ〜」

しつこくねばっていたらやっと口を開いてくれた夏唯は開口一番に、

「謝るなら許してやってもいいぞ」

ニヤリと笑う夏唯。その笑みは勝ち誇ったような感じだった。

「何であたしが謝んなきゃいけないの？人を馬鹿にして来たのそっちじゃん！」

そういつつも許してくれるなら謝ろうかななどと考えていた。

「そうかなら葵とはもう一生口聞かねえ。だからもう帰っていい」
淡々とした口調でそう告げられた。

何でそんなこと言うの？

葵に目に涙が浮かんできた。ここでないたら負けるそう思って必死に耐えていたが、ついに頬を伝って顎から涙のしずくが落ちた。

買い物袋の中身を取り出し冷蔵庫に入れるなどの作業を終えた夏唯は葵の向かい側のソファに座って初めて葵が泣いている事に気付いた。

「おいおい、こんなんでも泣くなよ」

あきれ気味に言う夏唯の言葉に後から後から涙が溢れてくる。

不意に夏唯が立ち上がり葵に向かって来た。葵は何を言われるかが怖くてつい叫んでしまった。

「こ、来ないで！」

涙交じりの声が聞こえなかったかのように平然として近づいてくる夏唯は葵の前でかがむと

「俺が悪かったよ。だからもう泣くな」

いつになく優しい口調でつぶやくように言った。そしてハンカチを差し出してくれた。

そのハンカチを「ありがと」ポツリと言って受け取った。

少し落ち着いたところで、葵は夏唯にぼそぼそと告げた。

「あたしこそごめんなさい」

その言葉を聴いた夏唯は満足そうに笑った。そして、「お互い様だな」とも行ってくれた。

「ねえ、夏唯？」

葵は無意識に夏唯に聞いていた。

「ん？」

短い返事が返ってきた。

「あたしと夏唯ってどうやって会ったんだっけ？」

その言葉に夏唯は暫く悩んでいた。

暫くして、夏唯が口を開いた。

「葵が葵の家で飼ってる犬が行方不明になったから探してほしいってここに来たんだ」

夏唯の言葉にそうだった！と思い出した。

「そう、そう、あの時友達からこの近くにいいところあるってここを勧めてくれたから」

そこで一旦言葉を切った。

「あの時は、もうちょっと素直で可愛げがあったのにな」と懐かしそうに天井を見ながらつぶやく夏唯。

「それはどーゆうことよ？今でも十分素直です！」

わざとムキになりながら言う葵に夏唯は「そうか？」と言う。

「でも、あの時はほんとに犬のことが心配で頭回らなかったんだよね」

懐かしむように言う葵。

「しかも葵、犬が見つかったとたんに泣き出すし」

さも、めんどくさかったと言いたいような口調で言う。

「しょ、しょうがないでしょ！あの時はほんとに嬉しかったんだもん」

葵がそっぽを向く。

「さらにはその後でここで俺の助手をさせるとか言い出すし」

夏唯がとどめを刺してくる。

葵は今だになぜあの時あんなことを言ったのかが分からない。

「だ、だってなんか……」

それ以上言う事が見つからず黙り込む葵に、

「なんか、なんだ？」

と催促してくる。

「夏唯みたいになりたかったの！」

とっさに思い浮かんだことを言うと、夏唯が一瞬きょとんとした後、肩を震わせながら笑い出した。

「な、なんで笑うのよ！」

不貞腐れた葵に、「ゴメン、ゴメン」と言っているのにもかかわらず、全く悪びれた様子は無くまだ笑っている。

そんな事をしているうちに事務所を閉める時間になった。

「今日は依頼無かったね」

夏唯が鍵を閉める様子を見ながらつぶやくように言った。

「そうだな」

そっけなくだが答えてくれた。

よし、あたしも帰ろう。

「じゃあね。また明日」

そう告げた葵を眺めるだけで返事は無かった。

帰り道葵は今日は少しだけ夏唯に近づけた気がするなあと考えていた。

解かれた呪い〜1〜

郵便受けの中に入っている手紙を取りながら名前を確認する葵。

笛吹^{ふえがき} 悠紀子^{ゆきこ} 誰だそれ？夏唯の知り合いかなあ？それとも依頼かなあ？

名前を確認したあとにそんな疑問を抱えつつ空木探偵事務所の中に入って行く。

「夏唯、手紙着てるよ」笛吹悠紀子サンって人から。夏唯の知り合い？」

思ってた疑問をそのままぶつけた。

「いや。知り合いにそんな名前いない」

案の定そっけなくかつめんどくさそうに答えられて、少し腹を立てる葵。それを見透かしたかのように鼻で笑ってくる夏唯。

いつもの日常だ。

「あ、それ捨てといて」

「え？それってこの笛吹さんって人からの手紙？」

「そう。捨てといてね」

なんで、知り合いじゃないなら依頼人かもしれないじゃない。捨てる理由を聞かなきゃ！

「知り合いじゃないなら、依頼かもしんじゃないでしょ？何で捨てんの？」

今度も、思ったことをそのままぶつけてみた。

「・・・・・・・・・・」

夏唯は黙っているばかりで何も答えない。

「ちよつと！聞いてんの？！」

ソファーに足を組んで座っている夏唯のもとに歩み寄った。

「・・・・・・・・・・」

それでも夏唯は無視し、紅茶をすする。

「ねえてっば！」

葵は両手を広げて思いっきり夏唯のほつぺたを叩いた。

「っ……!?!?」

バチンツという音とともに痛がる夏唯のかすかな声が聞こえる。

ちよっと思いつきりしすぎたかな……?

「はあ。葵はニュースとか視るか？」

はあ、って……ため息尽きたいのはこっちだっつもの!!

「うん。視るこっちや視るけど……なんで？」

腹を立てながらも、返事をする。

「ニュースを視てれば分ると思っただけどなあ……。」

なにやらブツブツ言う夏唯が無性に腹立たしくなり、ついに大声を上げてしまった。

「もお！先刻さっきから何なのよ!?!?ニュースとこの手紙と何の関係があるっていうのよ?」

その声にびっくりしたのか、無表情だった顔に少しだけ力が入ったような気がした。

「だから……。」

次の言葉をなんとというか考えてる夏唯を視ながら自分でもニュースと何が関係あるかを考えてみた。

最近のニュースといえば、このあいだ解決した綾香の事とか、不景気だとか、そんな事ばかりだ。

「あ、先に言っておくが、その手紙は依頼かもじゃなくて、まさしくその依頼だ」

何食わぬ顔で平然と言い放つ夏唯に少しびっくりしたけどすぐに自分考えを巡らすのに没頭した。

「ん……。分かんない……。」

つい語尾が小さくなりながらも音を上げると「葵は本当にニュースを視てるのか？」とあからさまに馬鹿にしたような表情をされた。

「み、視てるわよ！い、一応はだけどね……。」

また語尾が小さくなりながらも反論した。

「その手紙の笛吹悠紀子さんって名前に葵は聞き覚えとかないの？」

「ええ〜・・・、笛吹悠紀子さん？ん〜・・・」

暫くんとうなり声を上げて、「分かんない」ついに降参こうさんの声を上げた。

「はあ、その笛吹さんは、巫女一族の中の1人だよ」

渋々といった感じで話し始めてくれるのは嬉しいけど、葵にはまだまだ疑問がたくさんある。

まず、なぜ巫女一族の人がニユースと関係があるのか、そしてなぜ、巫女一族なんて事が夏唯に分るのか。他にも細かいことがたくさんあった。

まるで、葵の中でプチ事件が起こっているようだ。

「葵、そんな難しい顔をするな。順を追って説明するから、ニユースとどう関係があるかとか何チャラはすぐ分る。だから落ち着いて聞け」

少しパニック状態の葵に気付いたのか葵が考えいる事は夏唯にはお見通しだった。

「あ、うん分った」

先刻まで無性に腹立たしかった夏唯なのにその言葉だけで一気に悩みが引いていくそんな気がした。

「よし、じゃあ話し始めるぞ」

それを合図に夏唯は一気にここまでの話の？がらなかったところを繋げて言ってくれた。

夏唯の話を短くまとめるとこんな感じだった。

笛吹悠紀子という人は最近ニユースで話題にされている巫女一族の人のことで、今一族の跡継ぎとして修行をしているらしく、世の中では意外と有名ならしい。

そして、手紙が事件の依頼だと分ったのは、最近跡継ぎ争いか何かでいざこざが起こっているらしく、一族の中で一番後継者としてふさわしいといわれている悠紀子にそのいざこざの被害が一点に集中

してきて、悠紀子もニュースで大々的に探偵なんかには頼を頼もう話していたらしい。

だから、この手紙が依頼の手紙だと分つたらしい。この話を聞き終え葵は感心していた。

「さつすが夏唯だなあ、あたし、もし、そんなニュース知ってても一発で依頼だとは分かん無いもん」

と声を漏らすと夏唯は少し戸惑い気味になっていた。しかしすぐに自信満々の声が返ってきた。

「葵とは頭の作りが違うんだ。葵も、もう少しその脳を鍛えれば分つたのかもな」

いや、もう少しどころではないかも。などともつぶやいている。いちいちイラつく野郎だ！

そう思いながらもふと新たな疑問がわいてきた。

「ねえ、夏唯？依頼だつて分つた理由は分つただけでもさあ、なんで捨てていいなんていったの？ニュースでも大々的に話していたんなら引き受けてもいいじゃない！」

思つた疑問を単刀直入に切り出した。

「あゝそれは……」

暫く黙つてからまた話始めた。

「その巫女一族の中で起こっているいざごぎというのが噂によれば、心霊現象らしいんだ。もつとも、俺はそんな非科学的な話は信じないが、ただ、もし本当に心霊現象ならそれは探偵の仕事じゃなくて霊媒師とか僧層シヤウレイの仕事だろ？だから、捨てて良いと言つたんだ」

少し仏頂面になりながらも最後まで話してくれた。しかし夏唯は、話した事を後悔していた。なぜなら、葵の目がキラキラ光っているからである。

「心霊現象！！ほんとに？！じゃあさその依頼引き受けようよ！面白そうじゃん！！ねえ？やろうよ！」

もはや葵のテンションはMAXに達していた。

そう、葵はかなりの心霊現象や怖いはなしなどのオカルトが大好き

なのだ。

そこまで、考えが回らなかった夏唯は深いため息をついた。ここまで葵のテンションが上がってしまうと、夏唯にはもうどうにもできない。

夏唯はもう一度深いため息をつき渋々といった感じで、依頼を引き受ける事にした。

「仕方ないか」あくまでかなり小さい声でつぶやいたつもりだったのに、葵にはその声が聞こえてたらしくすぐに反応し「ほ本当に?! 本当に!?!」と繰り返して聞いてくる。

「ああ。依頼は引き受けるから少し黙ってくれないか?うるさい!」少し怒鳴れば静かになると思ったが、選んだ言葉が悪かったのか葵は全く怖気^{おそ}ついた様子はなくさらに騒ぎ出した。

「きゃー!! ありがとう夏唯! それでこそ夏唯だね!!」
夏唯の腕をぶんぶん振り回している。

暫くして、葵が落ち着いた頃に夏唯は手紙に書いてあった連絡先に電話をし始めた。

「あ、空木探偵事務所の空木夏唯と言います。手紙を読ませてくださいました。ぜひ引き受けたいと思います」
かなりの棒読みで葵は笑いをこらえるのに必死だった。

『本当ですか! ぜひよろしくお願いします』
はきはきとした声が一気に弾む声が受話器の向こうから聞こえてきた。

こうして、あたしと夏唯の巫女一族で起こっているいざこざを解決しにいくことが決まった。

解かれた呪い ②

10時に待ち合わせしていた。葵の家から歩いて10分ほどの距離の喫茶店で少し早めに来て暇をつぶしていた。

「あゝあゝ、夏唯早く来ないかなあ。って言ってもまだ約束の時間より30分も早いんだけどね」

「コーヒーを飲みながら自称気味につぶやいた。

流石に早く来過ぎかもなあ。いくら楽しみだからって一応は依頼なんだし。それにいくらあたしが早くに来たってどうせ夏唯が早く来ることなんてないんだし。むしろ、いつつ遅れて来る夏唯が今日に限って早く来るなんて奇跡みたいなのがあるわけないよなあ。

「はあ・・・」

ため息をつきながら考えていると、後ろから声が聞こえた。

「葵、葵っ」

「誰？」

自分が呼ばれているのに気付きゆっくりと振り向くとそこには夏唯が立っていた。見間違いかと思い、もう一度良く確認すると間違い無く夏唯がそこにいた。

慌てて時計を確認するとまだ9時45分だ。いつも遅れてくる夏唯がこんなに早く来るなんてありえないやっぱり人違いじゃないだろうか。とも思ってしまうほど驚いていた葵に、めんどくさそうに告げてきた。

「葵の昨日の様子だと待ち合わせの時間よりかなり早く来ると思っ
て、一つ先の電車で行こうと思ってな」

相変わらず眠そうだ。それにミニスカにニーハイソックス、上は肩だしTの上からカーディガンを羽織っているといった格好の葵に比べて夏唯はジーンズに黒のTシャツの上からYシャツを着ていて3つ目までボタンを開けている。髪もところどころハネている。

全くファッションなどにも興味がないといった感じだ。でも、そん

なそつけない格好でも夏唯はかつこよく思えるくらいのルックスだった。

こんな事を言うのは失礼極まりないが、葵は夏唯と会ってから、夏唯のことを認めたのは何でも解決に導く頭脳と性格とは真逆の顔立ちのよさだけだった。

暫くボーっとしていた葵を呼び起こすかのようにつんと額を弾かれた。

「何、ぼーっとしてんだ？早くしないと電車逃すぞ」

明らかに機嫌を損ねた夏唯の言い草にももう慣れた葵は何食わぬ顔で返事をした。

「あ、うん。ゴメン」

喫茶店を出て、歩いて3分で駅に着いた。

夏唯が切符を買いに行っている間に缶コーヒーを2本買った。

切符を持って戻ってきた夏唯に「はい」とだけ言ってコーヒーを渡す。

それと同時に電車がついた。早速乗り込んだ。

「ねえ、夏唯？」

「ん？」

コーヒーを飲みながらそつけない返事が返ってくる。

「夏唯ってさ、成績どの位なの？」

「・・・何その質問？」

あからさまに嫌がられて少しむっとしたがそれでも食い下がった。

「だってさ、夏唯って何でも事件解決しちゃうじゃん、あたしも夏唯みたいに解決してみたいからさ、どのくらいの成績だといいのかなあ？って思ったの！悪い？」

少しきつい口調で言ってみた。

それでも、表情一つ変えずに一人で頷いている。

「確かに、目標を持つのは良い事だな」

珍しく夏唯が納得した。

「じゃあ、教えてくれる？」

「ああ」

そっけなくだが答えてくれた。

「俺の成績はテストでは90点以上といったところだろうか・・・」
さも当たり前かのように言う夏唯の言葉に仰天する葵。

「はあ？きゅ、90点以上?!」

「ああ」

また、さも当たり前のように頷く。

90点と言えば葵の平均点より30点も上である。

それどころか、葵の学校で校内一の成績の人がやつと90点台を取れるといった状況なのに夏唯の言う90点以上は到底信じられなかった。

その考えを先読みしたのか夏唯が少し顔を歪めた。

「俺は嘘をつかない」

クスッ

機嫌を損ねたか夏唯の口から飛び出してきた言葉がまるで、小さい子が向きになってすねているような感じに聞こえ思わず笑ってしまった。

「なんだ？何がおかしい」

「べつにつに〜!」

ニヤニヤしながら答えてやった。

そんな時、ふと葵は疑問に思った。

「ねえ、夏唯？」

「ん？」とまたそっけなく返事が返ってくる。

「夏唯ってさ・・・学校行ってたっけ？」

思った疑問をいつものようにそのままぶつけた。

「・・・行っていない」

暫くの沈黙があり、その後にはぼそりと答えた。

「・・・行ってないって、じゃあ何で成績とか分るの？」

「誰も、成績では答えてないだろ？あくまで、テストの点数を答え

ただけだ」

めんどくさそうに返事が返ってくる。

「でも、テストの点数って、何処どこでテスト受けてるの？」

「塾でだ。そのくらい分るだろ？」

呆れ気味に言われても分らないものは分らないのだから仕方が無い。

「ふーん。じゃあ、あたしもその塾はいる！そしたら夏唯みたいに頭よくなるかも知らないし！」

葵の言葉にかなりビックリした様子だ。そんな夏唯の様子を見ているのも面白い。

「……葵には……無理だ」

少し躊躇ためらった後に小声で告げてくる。

流石にこの返答には少しムカツツと来た。

「何よー！馬鹿にしすぎじゃない？」

「いや、そうじゃなくて、俺が行ってる塾には入る前にテストを受けるんだ」

「て、テストぐらい！あたしだって、必死に勉強すれば大丈夫だもん！！」

少し強がってはみたが内心ではかなり困っていた。何たって葵はなぜかテストで自分の力を十分に発揮できないのだ。

「それでも、葵には無理なんだ」

厄介払いをするかのような口調で言われた葵はなぜそこまで否定するのか分らなかった。

「何でそこまで言い切れるのよー？」

考えるよりも聞くほうが早いと思いきずに聴いた。

「俺が通ってる塾は大学入試過去問題の習った範囲が出るんだ」

「習った範囲でなら大丈夫でしょ？」

「ただし満点を取らないとダメなんだ」

「……満点？そんなのありだろうか……」

「だ、大丈夫！」

なおも食い下がる葵。

それを、すぐ壊すように夏唯が呟いた。

「入ってからも、下克上げしげじょうありだ」

あゝもうそんなにあたしには無理なの？

はあ・・・

思わずため息をついた葵にいつに無く優しい口調でささやいた。

「ひどいことを言うようだが、葵には無理だ。俺でも、今ではついていくのが精一杯なんだ」

一瞬ドキッとしてしまう。いつも、夏唯は急に優しくなることがある。葵にとってそんな夏唯をみるのがちょっとした楽しみだった。

「・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・」

小さい声で、諦める事を承知した。

「それでこそ葵だ」

そういって、髪をクシャツとなでられた。

ちよっと嬉しかったが、葵は素直じゃなく、つい強がってしまった。

「あー、また子ども扱いするー!!」

不貞腐ふてくされたフリをした。

そんな事をしているうちに目的の駅についた。

解かれた呪い 〳〵〵

プシュー、という音とともに電車のドアが開いた。

かなりの人だからで、中に入るうとする人、出ようとする人がそれぞれ押し合っていた。

やっとおもいで、葵達も電車から抜け出した。

「ふうー・・・なんか、すんごい疲れたあ」

一息つこうと近くのベンチに腰を下ろした。夏唯もそれに続いた。

人が多いのは承知の上だったが、ここまで多いとは考えていなくて、かなり驚いた。

「なんか、スツゴイ都会って感じだね！。あたしらが住んでるところとかとは大違い！でも、ここまで、場所とかはつきりしてたら目的地もすぐ分るよね！！」

意気込みを述べるような口調で言っではみたものの、葵は極度な方向音痴のため、駅からは全て夏唯が道案内役のようなものだった。

「なんで、葵はそんなに道に迷うんだか・・・」

呆れ気味に言われ、「地図も読めないのか？」などと言われたが、葵は気にしていなかった。

夏唯が言っていることは正しいが、葵は気にしない事にしていいのだ。

「しょうがないでしょ？地図あっても迷っちゃうものは迷っちゃうんだから」

自分で言いながら、情けないと思った。

暫くの沈黙があった。夏唯が何もしゃべらないので何となく葵も黙っていたのだ。

「ここだ」

不意に夏唯が声を漏らした。

「え？」

つい、拍子^{ひょうし}抜けた返事になってしまった。あまりにも突然だったし、『ここだ』といわれても、目的地らしき神社のようなものは何処にも見当たらなかった、ましてや、近くにある建物は5階建てマンションしかない。

「このマンションの4階27号室に住んでいる」
いつもの口調で言われ少しほっとした。夏唯がこの口調でしゃべるときは、いつもいい方向に事が進むからだ。

「なんだ、神社とかに行くんじゃないやなくて、直接家に訪問するの……」
ちよつと残念と顔を歪めた。

ピンポン……ピンポン……ピンポン……
2回インターホンを押したが返事が無かった。

「お出かけ中だったかなあ？」

「またも、残念そうに首を捻^{ひね}る葵を見かねた夏唯。

「そんなに怪奇現象と出くわしたいのか？」

「ん……怪奇現象と出くわしたいって言うより、どっちかって言う^とと聞くだけがいいなあ。だって、本当にそんな事あったら怖いじゃない」

「はあ？葵は何を聞いてたんだ？怪奇現象と出くわさなければ、この事件は解決しないぞ？」

少し、驚きの気味の返事が返ってきた。

「そ、そんなこと分ってるけど……できれば体験したくないなあ
って思っただけだもん！」

不貞腐れてわざとらしく頬を膨らませた。

「あら？うちに何かようですか？」
急に後ろから声がついビックと肩が跳ねた。怪奇現象^{つんめん}が云々と
いう内容の話をしていたからなおさらだった。

振り返ってみると、身長が高くすらつとした体系のきれいな女の人
が立っていた。

「あ、もしかして空木探偵事務所の方かしら？」

驚きを隠せずにいた葵に気付いているのかいないのか分らないが、手をぱんとあわせて目を輝かせていた。

「？」

なぜこんなに嬉しそうなのだろうか？そんな疑問を抱いていた。

「ええ、このたびはご依頼ありがとうございます」

そういつて軽くお辞儀をした夏唯に続いて葵もお辞儀をした。

「まあ、これはご丁寧に。こちらこそ依頼を引き受けてくれて有難うございます」

その女性も深々とお辞儀をした。

「こんなところでもなんだし、どうぞ、中に入って。あ、いま鍵開けるわ」

鞆から鍵を取り出しガチャガチャと鍵を開けた。

「お邪魔します」

一言言ってから中に入った。

夏唯もそれに続く。

「どうぞ、狭い部屋だけど、適当に座つといて」

リビングに通された。

家具も少なく、女性の部屋にしてはずいぶん殺風景だった。

「今、お茶入れるね」

コートを脱いでキッチンに向かっていった。

「あ、お構いなく」

そつとつぶやいた。

暫くして戻ってきた手元にはおぼんがありその上に紅茶の入ったカップが3つ並んでいる。

机にカップを置き、座った。

「あ、自己紹介が遅れたわね。今回い依頼を頼んだ、笛吹ふえぶき 悠紀子ゆきこ と言うの。よろしくね」

ニコツと笑って手を差し伸べてきた。その手を握って握手を交わしたのは葵だった。

普通は夏唯がしなくてはけないのだが夏唯はこういうスキンシップをかなり嫌うからだ。

「空木 夏唯です。」

そっけなく、愛想笑いも浮かべない。

「あ・・の、私は向日 葵です。ひまわりって書いて向日葵むかひあおいです」

「早速ですが、依頼の内容をお話いただけますか？」

急かす様に促す。

いつも思うが、夏唯は礼儀というものが分っていない。

「あ、そうね。」

そうでした。とでも言いそうな口調だった。

解かれた呪い 4

悠紀子さんは何から話そうか悩んでいる、そんな様子でいる。

「うん。そーねえ、じゃあ、まずは依頼した理由から話そうかしら」

少し足を崩し再び話し始めた。

「今回依頼を頼んだのは、心霊現象が起こるからよ。その心霊現象の原因をつきとめてほしいの」

やはり、葵は疑問に思った。

なぜ、巫女である悠紀子が自分でどうにかしたり、霊媒師に頼むことをせず、心霊関係の全く関係ない探偵事務所に依頼するのだろうか。

首をかしげた。その葵に気付いたのか夏唯が葵を見てきた。

「な、何よ」

小声で聞く。

「いや、葵今お前、なんで霊媒師に頼まないのかとか考えてただろ」

凶星だ。

「それが何よ？普通の疑問でしょ？」

凶星だったがさして気にしていない様子を演じたが無駄だった。

「凶星か」

と行って、軽く笑われた。

「一々むかつくなあ！」

「じゃあ夏唯は何で分かってんの？」

「ああ」

その会話が聞こえたのか、悠紀子がまた話し始めた。

「私が、霊媒師とかに頼まないのはね、その心霊現象が幽霊とかそゆうのの仕業じゃないからなの」

「え？じゃあ、心霊現象じゃないんじゃ・・・それに、なんでそう言い切れるんですか？」

「やだね、葵ちゃん。私だって巫女よ？それ位分るわよ」
そつと、紅茶を飲む。

「で、その心霊現象って言うのがね、勝手にドアが開いたり、いきなり部屋の電気が消えてその窓に顔が浮かび上がるのよ」
指をさしている先には小さな天窓のような窓がついていた。

「あそこに顔が浮かび上がるんですか？」
葵が天窓を指しながら聞く。

「ええ、そうよ」

「なんだか気味悪いですね」

少し顔を歪めながらも天窓をみていた。

「それだけですか？」

「ええ 頻繁ひんぱんに起こるのはね・・・」

夏唯の質問にすばやく返事をした。

「頻繁に？では、今まで他にはなかったんですか？」

「あつたけど、たいしたことじゃないことよ」

夏唯のどんなそっけない態度でも笑顔を崩していない。でも、葵にはその笑顔の奥に疲れきっている悠紀子の表情があるような気がした。

「どんな小さなことでも構いません。いままでにあった事を全て教えてください」

自分で質問している夏唯なのにかなりめんどくさそうな口調だ。

「今までにあったことねえ・・・」

天井を仰ぎながら考えている。

「今までたくさんあつたから全部は覚えてないけど、変な声が聞こえてきたり、急にテレビが消えたり・・・ぐらいいしか覚えてないわね」

また紅茶を飲んだ。

解かれた呪い 5

長い沈黙の中夏唯は何かを一生懸命考えていた。

そんな夏唯のことも気にせず紅茶を飲み続けている悠紀子さんはずつと窓のほうを眺めている。

何かあるのだろうか？と、葵も目を凝らしてみたが何も可笑しい所も無ければこれといって不思議な模様など変わったことも無い。

何をそんなに見つめているんだろ？先ほどから悠紀子の行動をまじまじと見ていたが、悠紀子が見つめる先は変わらなかった。

「では、捜査はまた明日、行わせてもらいます」

長い沈黙を破った夏唯は何食わぬかおで、いきなり結論のようにいき捨てた言葉はあまりにも唐突であった。

「そお？もう少しゆっくりしてつてもいいのよ？」

「いえ、あくまで仕事なので・・・」

優しく微笑む悠紀子に対して冷静でそして、無感情に答えている夏唯の姿はまるで主に対して忠実に働く犬のようだった。

「では、また明日」

夏唯が立ち上がった。それに続いて葵も立つ。が、ずっと正座をしていたから足が痺れてしまって、うまく立ち上がれなかった。

「・・・っ！！」

足が痺れていてはまともに歩けそうに無いな・・・。

1人どうしようか悩んでいると後ろから冷たい言葉が飛んできた。

「なんだ、葵？これしきのこと、足が痺れたのか？」

「・・・っ・・・」

あたっていたので、言い返せずにいた。

どうしよう・・・。これマジで痺れてる。

「まあまあ、もう少し足を崩して座るときなさい。痺れが無くなったら帰りなさいよ」

優しく微笑まれ、お言葉に甘えようと思ってもう一度座った。

はあ・・・夏唯はため息をついたが葵は気にしなかった。

しばらくして痺れが無くなり帰ろうと立ち上がった。

その瞬間・・・。。。。。。。

解かれた呪い 6

ふつと、電気が消えた。

え？悠紀子さんが消したのかと思いきや、彼女が案の定いきなり暗くなり目が慣れていなかったせいも重なり悠紀子が何処にいるのかすぐに確認することはできなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・夏・・・・・・・・唯・・・・・・・・？」

なんとなく不安になり夏唯がいたはづの方向をみた。

少し闇に目が慣れてきたのかすぐに夏唯の姿を見つけることができた。

「黙れ！」

返ってきた言葉には少し動揺の色が読み取られたと同時に押し殺した声に違和感を覚え、なんとなく夏唯の見つめている方向にゆっくりと視線を向ける・・・・・・・・・・・・・・・・

「!!!!!!」

驚きのあまりに悲鳴を上げることできなかった。

そこには、例の悠紀子が言っていた顔が浮かび上げていた。そう、あの窓にまるで張り付いているようだ。

悲鳴を上げそうな自分を必死でこらえた。

ここで、悲鳴を上げたら夏唯何て言われるか・・・何よりそのせいで夏唯が手がかりをつかむ前に消えてしまっても困る。

どのくらいの時間がたったのだろうか？

そんな疑問を浮かべていた葵だがきつとまだ5分も経っていないだろう。

ふつ、消えたときと同じように急に電気がついた。

それと同時に顔も消えた。

「・・・」

またしばらくの沈黙があった。

葵はきつと自分の顔は今顔面蒼白だろうなどと考えた。そんな葵に對して悠紀子は平然としていた。

もう慣れた。そんな雰囲気だ。

悠紀子ならまだしも、夏唯もそうだった様子だった事に葵はびっくりした。

なぜそんなに平然としていられるのだろうか？

その秘訣をぜひとも教えてもらいたい。

「夏・・・唯・・・？」

恐る恐るもう一度か夏唯の名前を呼ぶ今度は返事すら返ってこなかった。

無視かよ！そう思ったが抑えることにした。

その理由は夏唯が眉間に皺を寄せ目をつぶり完璧に考え込んでいるからだ。

この状態の夏唯はどんな方法でも、何をしても全て無視だ・・・。

「悠紀子さん先刻のが例の顔ですか？」

ふいに夏唯が口を開いた。

「ええ、そうよ」

もう、私は慣れちゃったわと苦笑いをして見せた。

「そうですか。では、先ほどもいいましたが、また明日本捜査に入りたいと思います」

「ええ、よろしく頼みますね」

ニコツと笑い手を差し伸べる悠紀子に夏唯は無表情のまま、無言で手を出したがその光景は夏唯には似合わず、本当に滑稽な光景だった

解かれた呪い 〳〴〵

マンションをあとにして一度事務所に帰った。

てつきりどこかに泊まるのかと思っていた葵は、駅に向かっている夏唯に対して「帰るの？」とずば抜けて間抜けなことを聞き、大恥をかいていた。

「夏唯？なにか分かった？・・・ってわかる訳ないよね、あたしは、すぐに解決を求めるからいけないんだったよね・・・」
自嘲気味に笑ってみせた。

「・・・少しは成長したじゃないか。その通りだ、おまえは解決を急ぐからいけないんだ・・・」

ボソリとぶつきらぼうに発せられた言葉とは裏腹にかなり真剣な顔つきで、考え込んでいる。よくこんなに考え込んでいるのに答えてくれたものだ。

「あたしに何か出来ることあったら何でも言ってね、あ、あたしができることだね！」

念を押して言ってみたが案の定確かな返事は帰ってこず「ああ」と小さな声で返事が返ってくるだけだった。

(まあ、返事するだけでもいいってことかな・・・)

考え込んでいる夏唯の迷惑にならないように静かに物音を立てないように行動し、ブラックコーヒーを入れ、そつと机においた。

「はい、コーヒー。お砂糖とミルクは入れてないから、これ自分で入れて」

「ああ、ありがとう」

心ここにあらずと言ってもいいだろう全く感情がこもっていない表情で礼を言われても。

とおもいつつも、こつこつという事しか出きないので、一応笑顔で返しく。

「はあ」

夏自分の分のコーヒーを持って、夏唯の向かい側に座った葵は小さな溜息とともに一息ついた。

「何だその溜息は？」

今まで真剣に考え眉間に皺ばかり寄せていた夏唯が不意に顔を上げ問うてくる。

「え？いやあ、今日一日つかれたなあって思ってたさ、なんか邪魔しちゃった？」

「いや、邪魔にはなっていない考えるのをやめる事にしたただけだ。こんなに少ない情報では何も考えが出てこなくなつてな。それより、おまえ、疲れたつて、何かしたか？」

机に肘をつき上から目線の言葉をふりかけてくる。

「い、いや、何にもしてないけど・・・でも、色々あつたし・・・」
もごもごと口ごもりながら口にした。

また、このぐらいで疲れてどうする？とか、とんだへコタレだなとか皮肉で返ってくることを覚悟していたが、意外に普通の返事が帰ってきた。

「まあ、そうだな、今日はいろいろあつた。俺も、流石にちょっと疲れた」

これが普通の答えだとしても、夏唯が皮肉を言わずに素直に人の意見に賛同することが信じられず、おもわずあっけに取られていた。

「なにを、アホ面してるんだ？」

「なっ！アホ面つてっ・・・」

なんとか否定しようとしたが後々めんどくさいので止めておく事にした。

「アホ面はアホ面だ。そこはどうでもいい。今日はもう寝る。明日はもっとハードだぞ」

「ああ〜い」

だらしない返事したら、じつと睨まれたがしれつとした顔で、スルーした。

「じゃあ、おやすみ」

事務所を出て、自分の家路についた。

「あゝあゝ、明日はもっとハードだぞって、言われてもねえ、ハードにするのはおまえだろっつーのー!」
ひとりで、ぶつぶつと歩いていると、家についた。

翌日、帰ってきてからすぐに寝た葵が起きた時間は、9時30分。

「……………うそ……………」

やっこの思い出た言葉は今にも消え入りそうだった。

解かれた呪い 〓〓

「葵〜！夏唯君来てるわよ〜！早く起きなさいっ！」
いつものように、下の階から大声で葵の名前を呼ぶ母の声が聞こえる。

が、今の葵にはそれどころではない。

また、あの夏唯を待たせてしまった。

ましてや、こんな時間まで寝てたとなると、きっと夏唯は事務所で長いこと葵が来るのをまていたのである。事は云うまでもない。

「や、ヤバイ！」

分かっではいるものの、どうしても、寝起きの悪い葵はすぐに行動を開始することができず、2、3回母に呼ばれるまでだらだらと、ベッドから起き上がっていた。

それから、少しは目が覚めテキパキと行動し、歯磨、髪型、着替、と順々にこなして行った。

最後に残った、朝食はラップに包み、途中で食べることにした。

「お、おまたせ、夏唯・・・ごめんかなり待ったよね・・・」

深く反省して、頭を下げた。どうせまた、嫌味が返って来ると思い、覚悟を決めて、頭を上げずにいた。

「全くだ・・・と、言いたいところだが昨日は大変だったからな、今日のところはいい。が、今後気を付けるように」

顔を挙げた葵の額をデコピンし、念押しをする。

「はい」

思いがけない返事に驚きながらも、素直に返事をした。

昨日と同じ電車を利用して、悠紀子の家へと向かった。
ピンポン

「おはようございます。悠紀子さんはご在宅ですか？」
インターホンを鳴らしてドアの前で声をあげる。

「あら、早かったのね、ちょっと待って、今鍵開けるからね」
しばらくして、ガチャツと音がしてドアが開いた。

「どうぞ中に入って。って言っても、もうあまり時間が無いんだからねね」

笑っている悠紀子の格好は巫女服だった。

そういえば、悠紀子さんって巫女さんだったね。

「おはようございます。あ、もう出かけるならいいですよ、ついて行ってもいいですか？」

ナニも言わずにただ突っ立っている夏唯が変わって葵が悠紀子に聞く。
「あら、そお？別についてきても構わないけど、暇よ？」

訝しげに首を捻る悠紀子に葵はぶんぶんと手をふり、言い訳のよう
なことを云う。

「い、いいんです、ついてくても、悠紀子さんの働いている
近辺の人に聞き込みしたり、調査するだけですから！」

なぜ、こんな事を云ったのかは葵はぶんぶんとわからなかった。

どう考えても、おかしい返事に、少し顔が赤くなった。

「可愛いのね。若いつていいわね」

クスツと笑われさらに顔が赤くなる。

「では、行きましょう」

今まで、挨拶もなしに仏頂面で黙っていた夏唯が初めて口を開いた。

「なによー！挨拶もなしにしかも、開口一番がそれ？えらそーに！」

「寝坊した奴がよくもまあしゃあしゃあそんなことが言えるな」

反抗的に答えた、葵に仏頂面をさらに仏頂面にして言い返された。

「うっっ……」

さすがにこれには言い返せず黙っている葵をみて、夏唯葉、少し勝
ち誇ったような笑みを浮かべる。

「……」

なにか言い返したかったが言葉が見つからず開きかけた口を再び閉

ざした。

「それじゃあ、行きましようか」

重苦しくなった空気を一気に払いのけ、悠紀子はルンルンとエレベーターに向かって歩いて行く。

それに、無言で着いて行く夏唯を追いかけられるように駆け出した。

2人が先にエレベーターに乗りあとは葵が乗るだけだった、不意にエレベーターのドアが閉まり始めた。

「あ、ちよっ」

少し急ぎ乗り込もうとした葵を夏唯がとめた。

「葵は階段でこい。良いダイエットにナルぞ」

そして、ドアが完全に閉まった。

・・・は？あただけ、階段??何でー！?夏唯のばかー!鬼い!

心の中で叫びながら階段で一気に駆け下り初めた。

エレベーターよりも、少し早く一階に到着した。

はあっ・・・はあっ・・・

運動をろくにして無かったせいかわ、これだけで、息が切れてしまう。

「お疲れ、葵にしては早かったじゃないか」

ドアが開くかいなや、飛んできた言葉が皮肉だった。

解かれた呪い〜9〜

悠紀子の車に乗せてもらい、悠紀子の仕事場、神社へと向かった。

「ここよ〜あたしの仕事場」

巫女、神主などが止めるため専用の裏の駐車場に車を止めながら悠紀子が話しかけてきた。

「え、ここなんですかあ？」

葵の突拍子も無い質問に首をかしげる悠紀子。

「ええ、ここだけど、どうかしたの？」

「あ、いえ、前にここ来たことがあったもので、ていうか、毎年初詣はここって決めてるんです」

もしかしたらすれ違ったりとかしてたかも。

などとやっている間にも夏唯は一人で車から降り、サッサと中に入ろうとしていた。

「あ、ちよっ、待ってよ！」

急いで夏唯のあとを追いかける葵をクスクスと笑っている悠紀子が、視界に入り、ははつと苦笑いを残して

夏唯のあとを追った。

「ねえ、夏唯？」

神社の中をスタスタとあるく夏唯の後ろ姿に声をかける。

「なんだ？くだらないことだったら寝言で言え」

案の定帰って来る言葉は素直でもなければ可愛くもない言葉。

「く、くだらなくはないもん・・・た、多分・・・」

「だから、なんだと聞いてるだろ、さっさと言え」

自分で言いにくくしたくせに言わなかったら逆ギレ・・・はあ。夏唯といるとつくづく疲れるなあ。

「・・・あのさ、ここの神社ってなんか、神聖です！って感じがしない？」

「はあ？なんだそれは？」

「はあ？って・・・」

「いや、だからなんか不思議な感覚がしないっ？って事！」

夏唯の前に行き手を広げて解説のような事を言うとまた溜息をつかれた。

「あのなあ、葵ここ神社。当たり前だろ？神社が神聖じゃなくてどーすんだよ？おまえの馬鹿もそこ、まで来ると笑えないな」

正論を並べられたうえに、皮肉まで飛んできた。

流石にこれには葵も凹んだ。

「だ、だってさあ、なんか他の神社となんかちがうなあ・・・みたな・・・」

だんだんと語尾が小さくなっていく。

「はあ、そりゃ、神社で祀られてる物とか、いろいろなものの違いだろ？」

「そうなのかなあ？」

夏唯の言葉を信じれないとか正しくないとか思うつもりはないけどなんだかしっくりこなかった。

「まあ、なんでもいいじゃないか。神社は神社なんだし」

さっさと結論づけてしまう夏唯に納得がいかず、ダラダラ引きずりかけていた葵の思考を中断させたのは意外にも、夏唯ではなく、悠紀子だった。

「あら？二人とも、建物の中じゃないくて外見てるの？」

中から出てきた悠紀子は巫女服に神社と、すっかり巫女さんぽくなっていた。

「ええ、中はあとから見よう」と

夏唯がそっけなく答えた。

珍しいいつもなら何にも言わなくてあたしがなんか言ってるのに。

「なら、中から見なさいよ。まだ朝だし寒いでしょ？昼の暖かくな

「つてから見なさいよ」

悠紀子の提案に葵は断然賛成だった。

だが、夏唯がどうするかによって決まる。

夏唯は暫く考えたあと顔を挙げた。

「そうさせてもらいます」

夏唯の返事に葵がどれだけ嬉しかったかは云うまでもない。

とかれた呪い〜10〜

えーっと・・・悠紀子さんの言葉に賛同して、今はお道の中にいるという事なんだけど・・・

夏唯君??何をのんびりしているのかなあ?

そう、今は、なぜか机の前に座り悠紀子と向い合って、私と夏唯はがゆっくりとお茶を飲んでいるだ・・・あれ?調査は?と葵の中で渦巻く気持ちは出て行く隙を見つけることが出来ずにただただ頭の中をぐるぐると廻っている。

それに、夏唯も、何のんびりしてるの?と、先刻と同じような疑問をぶつけうように少しだけ夏唯の方を見た。

夏唯はわたしの行動に気付き一瞬こっちを見てすぐにそらした。

きつと、夏唯には分かっただろう。私がどんなことを思っているかなど、ぶつきたい質問の内容は何かなど。

分かっていても、あえて教えてくれない。ちゃんと聞けって事かそれよりも悪ければ自分で考えろということだ。

このそっけないかつ意地悪なひねくれ者はいつもこうだ。

ああ言えばこう言う。いわゆる屁理屈というものだろう。はあ。

心の中で静かにため息を付いた。

つもりだったが本当についてしまったらしい。

「あら?つかれたの?ため息なんてついちゃって?」

おもむろに口を開いた悠紀子に慌てて弁解の言葉を探す。

「い、いや!疲れたとかそんなんじゃないなくて、えっとその・・・安堵の溜息とい今ますかなんか落ち着いちゃって、ついっ・・・」

とっさの分かりやすい、とてつもなく在りきたりな嘘をついたにも関わらず、悠紀子は「そお?」
と言っただけだった。

すこしだけホツとする。

その光景を見ていた夏唯表情こそ変わってないもの内心では私のことを罵って嘲笑っていることが分かる。雰囲気的に……。

長年一緒にいると分かっってしまうのだ……。

解かれた呪い 〔11〕

何時までも夏唯は本題に入る気が無いのかな何か考えがあるのか・
・？

いったいどれくらいの時間が過ぎただろうか？

もう10時30分を回っている。午前中終わっちゃうじゃん！！

ついにしびれが切れた葵は夏唯に効くことを決意した。皮肉をいわれるか無視されるかの覚悟も決め……。

「夏唯？いつまでまつたりしとくの？調査は？」

思いつきて聞いて、出た言葉はいつもどおり平凡な言い方。

なのに、いちいちそれにつつかてくるのがこいつ！

「わからないのか？」

……わかんないから聞いてんだろ！！！！

こころの中で叫んだ。先刻のため息のようについてしまわぬように。

「うん。分かん無いから聞いてんの」

気持ちを抑え必死に平常心を装う。

「さあ、ね。いつまでだろ？」

つぶやくに聞こえてきた言葉を一瞬理解することができなかった。

さあ、ね？いつまでだろうって……。

「はあ？」

ついででしまった一言。

やばい！またなんか言われる！！

「……」

意外にも無言だった。

ちよつと安心。

ていうか、さあってっ聞きたいのはこっちだったの！！

「やることないの？」

なんとなく聞いてみた。

「ああ。御堂の中は調べる必要がないからな。調べたいなら勝手に調べとけよ」

夏唯の口から出た衝撃的言葉にただ仰天していた。

や、やることないって。じゃあなんで御堂の中に入ったわけ？

必死に叫びたいのをこらえていた。

クスクスクス

不意に聞こえて来た笑いを堪えるような声に反応して顔を上げた。

するとそこには先刻までいなかった、とてもキレイな黒髪でロング

ヘアー。全体的にすらっとして、明るい感じの人。どっちかっ

て言うと可愛い感じがする。とにかく、全く知らない人物が座って

いて葵を見てクスクスと笑っている。

だ、誰？

第一印象とかどんな人だとかそんなこと通り越して出てきた考えは

それだけだった。

「えつとっ……」

言葉に詰まり、何を言っているのかわからずオロオロとしていたら、

悠紀子が隣の人物に（失礼でっしょ）と言っているのが聞こえた。

その声に我に帰り冷静に考えた。

「えつと、そちらの方は？」

「草部 嘩いんかくって言います。すみません笑ちゃって……」

まだ少し笑いながら自己紹介をしてくれた。

「あ、あたしは向日 葵あおいって言います。こっちは、」

「空木 夏唯です」

葵が夏唯の名前も言おうとしたのを遮るように夏唯が名乗った。

めずらしい。素直にそう思った。

その理由はいつもだっまっているからだ。

どうゆう心境の変化かは分からないけど。

「この人は私のライバルみたいなものなの。あまり、そうゆう気持

はないけどね」

「悠紀子にはかなわないよー。だっってもう、巫女の長おんになれるの

決定してるも同然じゃん」

「そんな事ないわよ。これから変わってくるかもしれないでしょ？」
そんな何気ない話に耳を傾けていると、夏唯がいきなり立ち上がった。

ま、また失礼極まりないことをっ！！

「外の調査しに行くぞ。もたもたするな」

もたもたするなって言われましてもねえ。夏唯君そんなにいきなり立ち上がられても困るんだよ。

「はい、はい、では、失礼します」

2回返事で帰してやった。

睨まれた。

解かれた呪い 12

外に出て難の調査をするのか・・・

「夏唯？どんな調査するの？」

われながらハツチャケた質問だと思う。

「三択で選べ」

・・・？

「1、落ちているもの、手がかりになる物を拾う 2、物的証拠を
探す 3、謎解きに必要なものを探す どれだと思う？」

・・・？

頭に浮かぶものは【？】だけ。

「それ、大体がどれも同じじゃあ・・・」

恐る恐る口にした言葉。どっちかって言うと単刀直入に言ってしまった言葉。

「へー・・・」

へー？へーって何？？なんでへーって言うの？あたしなんか変なこと
と言った？

やはり付くものは【？】

「へー・・・って何？」

わからないものは仕方がない。その言葉を言った本人に聞かなくて
は・・・

「別に。葵でも分かるんだ、と思って」

「なにそれ？下に見すぎじゃない？」

ついつい言ってしまった言葉今日は何を言われるのか・・・。
自分で言った後に後悔する。いつものパターン。でも、違ったのは
夏唯の返事だった。

「そうだな。葵もこのくらい分かるよな・・・下に見すぎたな、ゴ
メン」

・・・今、目の前に居るのは誰だろう？夏唯じゃないよな・・・だ

。 っ て夏唯だつたらいつも無視か皮肉が飛んでくるところなのに・・・
今の言葉は誰の口から発せられたのだろうか？

これでもかというほどの【？】

「なんだよその顔？百面相か？」

ぷつと吹き出して笑う夏唯。

あれ？夏唯ってこんなに笑ったけ？？

そもそも、さつきから夏唯変じゃない？急に優しくなるし、ポーカ
ーフェイスじゃなくなってきたし・・・

御堂野中であんなにポーカークフェイス決めこんでたのに。ましてや
皮肉ばかり言っ て来てたし・・・

????

今の葵の脳内は【？】で埋め尽くされていた。

「夏唯・・・？熱あるんじゃない？」

やはり言葉の中にも【？】がある。

夏唯がこんな態度をとるときはいいことがない・・・気がする。こ
んなに優しい態度をとったことがないため、戸惑ってしまう。まし
てや、こんな態度をとるとは一生思っていなかったし。

かなり混乱している葵をよそに夏唯訝しげな顔をしていた。

あれ？さつきまで笑ってなかったけ？

笑っていたら笑って居るで不気味だが今まで笑っていたのに急に訝
しげに顔をゆがめられても対応に困ってしまう。

「なんで俺に熱があるとおもうんだ？」

急に口を開いたかと思うとその質問に拍子抜けた。

「は・・・？」

出た言葉は一言だけ。夏唯はいきなり何を言い出すのだろうか？

「は？ってお前・・・。自分でいったんだろ？熱あるんじゃないか
？って。もう忘れたのか？」

からかうようにだがいつもとは何かが違う。

夏唯の言ったことで思い出した。先刻、自分で聞いたばかりではな

いか。考えを色々とめぐらせていて忘れてしまっていた。

「えーっと・・・それはーその・・・。」

口ごもる葵をただじっと見つめる夏唯。いつもならここで夏唯が『さっさと見え』とか言っつて結局押されて白状しているはず・・・なのに・・・何この状況？なんで何時までもあたしのこと見てるの？いつも見たいに催促しないの？

「えーっと・・・あれはーじょ冗談だつて！！ほら、何本気にしてんお？」

あはは・・・と必死に笑顔を作る。正直ちゃんと笑顔になっているのかは自信がなかった。

「冗談？そうか」

「そうそう！！冗談だよ！冗談！！」

苦し紛れの言い訳に過ぎないこと。いつもの夏唯ならきつと睨まれていただろう・・・いや、その前に催促されて白状していたかもしれない。

取り合えず今日の夏唯羽何かがおかしい何か・・・が・・・

解かれた呪い ①② (後書き)

長らく更新できなくてすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192j/>

向日葵物語《ひまわりものがたり》

2011年1月25日23時20分発行